

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：42676

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23700290

研究課題名(和文) アメリカ公共図書館の発達停滞にみるアウトリーチサービス発展条件に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical research about the outreach service development conditions of seeing to development stagnation of a U.S. public library

研究代表者

中山 愛理 (Nakayama, MANARI)

大妻女子大学短期大学部・国文科・助教

研究者番号：80435239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：公共図書館のアウトリーチサービスを先進的に取り組んできたアメリカ公共図書館の事例を対象に、アウトリーチサービスが遅滞した要因を明らかにし、公共図書館が抱える図書館サービス上の課題を示すことを目的とした。

本研究の結果、サービスの成否を分けた要因として、制度的な要因よりも、属人的な要因や財源的な要因が大きく影響していることが確認された。これらの要因は、アメリカのみならず、日本の公共図書館におけるインターネット上のアウトリーチサービスの発展に向けて、克服しておくべき点として確認された。

研究成果の概要(英文)：This was intended to be through Case Analysis of Public Library of America, which has been working in advanced outreach services of the public library, to clarify the factors that outreach services were delayed, shows the challenges of library services on public libraries face results of the study, as a factor that has divided the success or failure of the service, than the institutional factors, that factors specific factors and financial resources in gross have a significant impact has been confirmed. These factors were identified as a point to not only the United States, towards the development of outreach services on the Internet in public libraries in Japan, that should be overcome.

研究分野：総合・新領域

科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学

キーワード：アメリカ公共図書館 アウトリーチサービス

1. 研究開始当初の背景

(1) 公共図書館は、インターネットを通じて図書館サービスに取り組みはじめている。インターネット上におけるサービスも含めて、公共図書館のサービスの多くは、利用者の個別的な属性やニーズにとらわれない貸し出しや読書会などであった。その一方で、公共図書館は個別の利用者の属性やニーズに対応するサービスとして、マイノリティに対するアウトリーチサービスに取り組んできた。

今後、図書館サービスが、インターネット上で盛んになれば、インターネット環境におけるマイノリティの状況を踏まえた「公共図書館アウトリーチ」に取り組む必要があるといえる。

(2) 公共図書館においてあるサービスを実施しようとする際、なぜ、成功する事例と遅滞する事例とに分かれてしまうのか。公共図書館の関係者にとって、この疑問は公共図書館のアウトリーチサービスをはじめとするあらゆるサービスに通底する関心事であるといえる。

(3) 公共図書館が今後積極的に取り組んでいかなければならないインターネット環境を踏まえたアウトリーチサービスではあるが、サービスを充実させ、継続的に実施していくための方策を検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカの公共図書館におけるアウトリーチサービスの遅滞していた事例を調査し、その成功を阻害した要因を分析するとともに、アウトリーチサービスの現状を把握することにした。それらを通して史料の分析や検討で、明らかにした公共図書館のアウトリーチサービスの停滞させた要因が、現状の公共図書館でも継続しているのか、変化が生じ改善したのかを確認することにした。そうしたことを踏まえて、公共図書館が今後、インターネット上で提供する図書館アウトリーチサービスの実現に向けて、克服しておくべき課題(求められる諸条件)をこれまでの歴史から明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、文献調査と史料調査との分析を組み合わせている。

これまでに取り組まれた状況を調査、分析するために、図書館の年次報告書、ニュースレター、アメリカ図書館協会の刊行物などを対象とする文献調査とアメリカ図書館協会文書、トミー・バーカー文書、メアリー・ロスロック文書などの史料調査を訪米し行い、その結果得られた史料を分析することで図

書館アウトリーチサービスの実施状況や課題等进行分析・検討した。

分析視点として、サービスの継続状況、運営資金の状況、当時の評価などを中心に据えた。

4. 研究成果

(1) 1年目は、アメリカ南部地域の公共図書館におけるアウトリーチサービスの遅滞していた事例を調査し、その成功を阻害した要因を分析する準備作業として、国内で入手可能な文献の入手と分析を行った。その結果、1930年頃、アメリカ図書館協会による南部の図書館エクステンションサービスの状況調査が行われていたと確認された。それを踏まえて、国内で入手可能な範囲で当時のアメリカ図書館協会図書館エクステンション委員会の文書を分析した。

その結果、アメリカ図書館協会エクステンション委員会は南部のいくつかの州で当時マイノリティであった黒人の利用可能な巡回文庫の存在を把握していたと確認された。また、1929年 *Library service to negro* という小冊子を作成し配布するなどのアウトリーチサービスを促すことにつながる側面的な取り組みをしていた。こうしたことから、図書館エクステンション委員会はその活動の一部に黒人に対する図書館サービスの促進を包含していたといえる。

しかしながら、図書館エクステンション委員会の文書などを分析すると同委員会は自らが主体的に方針を立案し、それに基づき活動を推進していなかった。むしろ、現状を把握し発信することに限られていた。図書館エクステンション委員会は黒人というマイノリティの問題が南部のみの問題ではないことを認識しながら、実質的なアウトリーチサービス促進に結びつく活動を行わずにいた。その背景には、図書館エクステンション委員会自体が活動資金の確保に苦勞し、主体的な活動を行うまで至らなかったという要因が考えられる。また、そうした活動を進めるための継続的な資金の欠如という要因が確認された。以上の点から明らかになったことを学会などで報告した。

(2) 2年目は、まず前年度の資金という視点に着目し1920年代から1940年代の南部の図書館の運営資金について調査を行った。2012年8月13日から8月16日までイリノイ州アーバンのイリノイ大学アーバナ・シャンペン校の文書館を訪問し、そこに所蔵されているアメリカ図書館協会図書館エクステンション委員会の文書を調査し、撮影した史料の整理と分析を行った。そのことにより州により運営・資金の状況の差が大きいことを確認した。こうした結果を踏まえて、サービスの実施状況に影響をもたらしていた点を学会などで報告した。

歴史的な調査を進め、検討を行う一方で、現在の南部の図書館におけるアウトリーチサービスの状況についても高齢者を事例として調査し、分析した。その結果、高齢者宅への図書配達などに、ボランティアの高齢者を活用する工夫などを試みることで運営費用の抑制を図っていた。それはまた、利用者の満足度を高めることにもつながっていた。このような成果を踏まえ「アウトリーチサービスから多様な高齢者サービスへ：アメリカの公共図書館」にまとめた。

また、年度末から次年度に向けて、図書館エクステンション委員会による南部の図書館エクステンション状況調査で中心となった人物として確認されたバーカーについても調査に取り組んだ。バーカーとともに、南部の図書館サービスを推進したロスロックという人物についての調査もあわせて取り組んだ。

(3) 3年目は、アメリカ南部と対照的な北部の事例として、1960年代にアウトリーチサービスの先進的な事例と考えられる取り組みを行っていたニューヨークのブルックリン公共図書館の事例を調査した。最終的にその取り組みが成功と評価するのに値するかという視点から再検討した。その際、失敗に至りそうな要因をうまく成功と評価されているものへと結びつけていたことがないのかという分析も行った。

これらの分析を行うために、ブルックリン公共図書館の刊行物等が所蔵されているニューヨークのブルックリン歴史協会図書館を2013年8月9日に訪問し、史料調査を行った。ブルックリン公共図書館のアウトリーチサービスはそれまでの永い伝統的なサービスの延長上に位置づけられていたこと、徐々に内容を拡充していったこと、途中でLSCA(図書館サービス建設法)という継続のための財源的な裏付けを確保できたことが成功と評価される活動へとつながった。その一方で、1970年代初頭に行政の財政難に影響を受けてサービスの縮小への動きも確認された。

また、前年度末から準備を進めたバーカー文書の所蔵されている、アメリカジョージア州アトランタにあるエモリー大学を2013年8月14日から16日まで訪問し、史料調査を行った。同様にロスロック文書の所蔵されているテネシー州ノックスビルにあるローソンマクギー図書館を2013年8月11日から13日まで訪問し、史料調査を行った。それらで入手した史料を整理と分析した結果、アウトリーチサービスの前身と考えられている拡張サービスの成否を分ける要因のひとつとして、館長や職員などの方針といった属人的要素が影響していた。また、推進する方針がみられたとしても、前年までに確認した資金的要因で継続できず失敗と見なされるケースも存在した。

(4) 研究期間全体を通して、アメリカの公共図書館が取り組んできた拡張サービスからアウトリーチサービスという一連の流れのなかで、そうした取り組みが失敗に至る要因をいくつかの年代の事例をもとに分析・検討を行った。それらを通して、資金的要因、人的要因などのアウトリーチサービスの成否に関わる点を明らかにした。また、そうした要因が現在取り組まれているアウトリーチサービスとどのように結びついているのかといった現状についてもまとめた。

(5) 本研究の目的は、公共図書館が今後、インターネット上で提供する図書館アウトリーチサービスの実現に向けて、求められる諸条件をこれまでの歴史と現在取り組まれているアウトリーチサービスの比較から明らかにすることであった。本研究を通して、アウトリーチサービスの継続と中断の経緯を明らかにするとともに、継続していくために必要な諸条件を検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

中山愛理、アメリカ南部における女性図書館員の思想と活動、茨城女子短期大学紀要、査読無、39巻、2012、pp.71-76.

〔学会発表〕(計4件)

中山愛理、アウトリーチ・サービスにみるコミュニティと利用者の再発見、第4回京都国際図書館フォーラム、2013年8月4日、(京都大学 吉田キャンパス)

中山愛理、アメリカ南部における公共図書館の停滞、第3回京都国際図書館フォーラム、2012年8月6日、(京都大学 吉田キャンパス)

中山愛理、アメリカ公共図書館の館外サービス研究を考える—『図書館を届ける』に基づいて—、日本図書館文化史研究会2012年度第1回研究例会、2012年7月14日、(明治大学 和泉キャンパス)

中山愛理、1920年代から30年代のアメリカ南部における図書館エクステンション—アメリカ図書館協会とのかわりを中心に、第59回日本図書館情報学会研究大会、2011年11月13日、(日本大学文理学部キャンパス)

〔図書〕(計1件)

溝上智恵子ほか編、学文社、高齢社会につなぐ図書館の役割—高齢者の知的欲求と余暇を受け入れる試み、2012、pp.69-82. (中山愛理 分担執筆)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

中山 愛理 (NAKAYAMA, Manari)
大妻女子大学短期大学部・国文科・助教
研究者番号：80435239